

平成30年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

グローバル化に対応する力を身に付け、持続可能な社会づくりの担い手を育成するために「グローバルシティズンシップ科」を設置し、中学校の教育課程におけるシティズンシップ教育の在り方に関する研究開発

2 研究の概要

本研究では、国内外の教育の動向を鑑み、グローバル社会の中で必要な資質・能力を身に付け、持続可能な社会の担い手を育成する。本研究において以下の3点を研究の柱とし、中学校課程におけるシティズンシップ教育の在り方に関する研究を実施する。

- ①社会参画意識の向上
- ②持続可能な社会づくりの担い手の育成
- ③多様な他者と協働できる力の習得

本研究を進めるにあたっては、国内外のシティズンシップ教育の動向を踏まえる同時に、平成26年に最終年を迎えたESD（持続可能な開発のための教育）、平成27年9月に国連総会において採択されたSDGs（「Sustainable Development Goals」持続可能な開発目標）の概念を学習内容に取り入れて研究を進める。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究仮説

本科を実施するにあたっては、従来の学校教育における以下の3点を課題として捉え研究を進める。本科を学習することによって、生徒が社会参画意識を高め、多様な他者と協働できる力を備えた持続可能な社会の担い手となることと仮定する。

①「総合的な学習の時間」をめぐる課題

総合的な学習の時間においては「体験」を伴う活動が多く設けられているが、せっかくの体験を各教科の学習や社会生活と結び付けることに課題が残る。

②義務教育課程における「シティズンシップ教育」をめぐる課題

選挙権年齢の改定に伴い、高等学校では、副教材「私たちが拓く日本の未来」が配布され模擬選挙等をはじめとした実践が進められている。また成人年齢の引き下げに伴って、シティズンシップ教育の重要性は一層高まっている。

中学校課程においては、中学校3年生の社会科公民的分野の中で政治・経済・国際社会に関する知識を学び、社会参画への意識付けとなりうる学習を展開している。しかし、限られた時間の中で学習となるため知識中心の学習活動に陥ってしまう点に課題があり、中学校課程におけるシティズンシップ教育の研究の必要性が求められている。

③カリキュラム・マネジメントの視点からのカリキュラム作成をめぐる課題

中学校課程においては教科の特性を生かし、教科担任の授業が展開されているが、教科と教科のつながりや重なりを意識した授業を展開していくことが課題としてあげられる。カリキュラム・マネジメントの視点から教科の学習内容と本科での学習内容や本科で育む資質・能力の相互関係を明

らかにすることが必要である。

こうした課題の解決に向けて、本校ではグローバルシティズンシップ科を創設し、総合的な学習の時間における体験活動、各教科で学習した知識に加え、開発教育や国際理解教育で扱ってきた題材を用いて、社会参画を目指した「参加型学習」の方法を用いて展開する。

本科が生徒主体の学びであることから、生徒自身がより一層「学ぶ意味」を理解し「学習意欲の向上」、さらに「学力の向上」へつながることが期待される。

(2) 必要となる教育課程の特例

- ・総合的な学習の時間を置き換え、新教科「グローバルシティズンシップ科」を設置
- ・全学年で実施
- ・1年生は年間50時間実施
- ・2年生・3年生は年間70時間実施

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

月	学習単元		
	1年生	2年生	3年生
4月	オリエンテーション	オリエンテーション	オリエンテーション
	世界一大きな授業 先輩から学ぶ	世界一大きな授業 1年生に向けた発表	世界一大きな授業
5月	生徒総会に向けて	生徒総会に向けて	生徒総会に向けて
			修学旅行に向けて
6月	ワークショップ体験 ・体験	身近な職業について ・「働きかた」を考える ・職場体験	・上尾クイズ ・SDGs フォトコンテスト (京都)
	・振り返り	・まとめ	・修学旅行振り返り
8月	<夏休み宿題> WFP エッセイ	<夏休み宿題> JICA エッセイコンテスト 「持続可能な社会づくり」に 関する資料収集	<夏休み宿題> JICA エッセイコンテスト
	SDGs を知ろう・深めよう ・理想の100人村を つくろう	持続可能な社会の実現 ・クラステーマ決定 ・SDGs について	上尾をプロデュース! ・市政講座 ・課題設定
10月	・SDGs について	・グループ別学習	・関係機関訪問
	・SDGs を自分の言葉で	・課題設定 ・資料収集	・アンケート実施 ・資料収集

11月	・社会課題と SDGs	・資料分析 ・訪問先での質問作成	・政策評価 ・提案書、企画書作成
12月	・新聞を用いた レポート作成	・校外学習（テーマ別の施設 を訪問し、インタビュー）	・プレゼンテーション準備
1月	・社会における SDGs	・学習振り返り ・クラス討議 ・レポート作成	・学習発表会
2月	・発表会準備	・プレゼンテーション準備	まちづくりと SDGs ・3年間の学習の振り返り
3月	・学習発表会	・学習発表会	

(2) 研究の経過

	実施内容等		
	授業について	校内研修	外部との連携
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の形態の習得 授業の形態に慣れ親しむことを目的として、ワークショップ型・参加型学習の授業を積極的に取り入れた。 ・課題追求のプロセス テーマ設定→調べ学習→発表のプロセスで、自ら設定した課題を追求し、課題解決に向けた方策を考え、発表できる場を設定した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ファシリテーター研修の実施 ファシリテーターとしての教師の育成を目指し、ファシリテーターとして活躍されている方を講師として、研修を実施した。ワークショップ形式の授業を習得できるよう研修を組み立てた。 ・プレ授業の実施 新しい単元に入る前に、プレ授業を行い、進め方について確認した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ガーナとの文通 JICA、青年海外協力隊の方と連携し、2年生の生徒と現地の中学校との交流を実施した。今後も現地と連携し、文通交流を継続する。 ・NGO との連携 講演会、校外学習の訪問先等、国際協力 NGO との連携を図り、協働してプログラムを作成した。
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ・学年ごとのカリキュラムの作成 学習内容を精選し、学年に応じた指導計画を作成した。 ・学年ごとの目指す生徒像(評価規準)の作成 学年の学習レベルに応じた目指す生徒像を設定し、到達目標を明らかにした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・評価に関する研修 ルーブリック作成や、学年ごとの目指す生徒像について協議し、客観的な評価ができるようにした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域との連携 3年生のプログラムの中で保護者の方、地域の方、市役所の方に講師として参加してもらい、地域の課題について共有した。 ・省庁・企業・NGO 等との連携 校外学習の訪問先、授業へのサポート等、各専門分野の方と連携したプログラムを作成した。

<p>第3年次</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラムの検証 2年次に作成した学年ごとのカリキュラムを検証し、内容の精選を図った。 ・外部連携を計画的に取り入れたカリキュラム作成 2年次までの取組を振り返り、計画的に外部との連携を取り入れ、地域や研究機関との連携を強化した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラムの視覚化 グローバルシティズンシップ科の学びと他教科の学びの重なり合いが見えるような年間指導計画を工夫して作成した。 ・SDGs との関連付け 各教科の年間指導計画の中にSDGs の17のゴールとの関連性をもたせた。SDGs を軸とした教科横断型の学習ができるよう研修を設けた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・省庁・企業・NGO 等との連携 校外学習の訪問先、授業へのサポート等、各専門分野の方と連携したカリキュラムを作成し、学校と社会の連携を強化した。 ・地域との連携 市政講座を実施し、市役所の各課から上尾市の取組についてお話をいただいた。 まちづくり提案を地域や保護者の方にも聞いていただく場を設定した。
<p>第4年次</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校課程におけるシティズンシップカリキュラムの作成 3年間を見通した学習内容、学習手法を合わせて示し、評価規準と授業の整合性を踏まえてカリキュラムを作成した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グローバルシティズンシップ科の効果の検証 3年次までの取組を振り返り、データを用いた客観的な評価ができるよう学年内で検討し、本科の効果をまとめた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・継続的な連携の仕組みづくり 授業実施にあたって、必要な関係機関との連携が継続的になるよう校内での体制を整えた。

(3) 評価に関する取組

<p>第1年次</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・年度当初に全校生徒へシティズンシップに関する項目を問うアンケート調査を実施、回答を分析 ・4月の校内研修にて教職員向けにグローバルシティズンシップに対する意識調査、指導方法に関するアンケート調査を実施 ・レポート・ワークシートなどの制作物による評価 ・学習活動や成果等の記録や作品を計画的に集積したポートフォリオによる評価 ・評価カードや学習記録などによる生徒の自己評価・相互評価 ・発表や話し合いの様子、学習活動や活動の状況などの観察による形成的評価
<p>第2年次</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・1学期に全校生徒へシティズンシップに関する項目を問うアンケート調査を実施(2年生3年生は昨年の結果との比較・分析) ・レポート・ワークシートなどの制作物による評価 ・学習活動や成果等の記録や作品を計画的に集積したポートフォリオによる評価 ・評価カードや学習記録などによる生徒の自己評価・相互評価 ・発表や話し合いの様子、学習活動や活動の状況などの観察による形成的評価
<p>第3年次</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・1学期に全校生徒へシティズンシップに関する項目を問うアンケート調査を実施(1年次2年次の回答と併せて比較・分析) ・レポート・ワークシートなどの制作物による評価 ・学習活動や成果などの記録や作品を計画的に集積したポートフォリオによる評価 ・評価カードや学習記録などによる生徒の自己評価・相互評価 ・発表や話し合いの様子、学習活動や活動の状況などの観察による形成的評価

第4年次	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1学期に全校生徒へシティズンシップに関する項目を問うアンケート調査を実施（過去のアンケート調査との比較・分析） ・ レポート・ワークシートなどの制作物による評価 ・ 学習活動や成果などの記録や作品を計画的に集積したポートフォリオによる評価 ・ 評価カードや学習記録等による生徒の自己評価・相互評価 ・ 発表や話し合いの様子、学習活動や活動の状況などの観察による形成的評価 ・ 今までの教育活動を振り返り、最終的な評価について検討 ・ 社会参画意識を図るための、卒業生への追跡調査の実施 ・ 卒業した該当生徒へのインタビュー調査を実施
------	---

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

ア 児童・生徒への効果

- ・ 豊かな人間関係の構築

グローバルシティズンシップ科で扱った話題（難民問題や環境問題など）について新聞やニュースを追いながら、常に話題にするようになった。生徒同士で質問をし合いながら話題を深めている様子が学校の中の随所で見られるようになった。

- ・ 思考力・判断力・表現力等、学ぶ意欲などを含めた学力向上

グローバルシティズンシップ科で扱う課題を話し合うためには教科学習の知識も必要であると生徒自身が認識し始めている。教師側が指示を出さなくとも、社会科の資料集や地図帳を使いながら、本科の授業に参加する生徒が多く見られ、教科との連携が自然な形で進んでいる。

また、常に物事を複眼的にとらえ、多様な考え方をもち、受け入れる生徒が増えている。話し合い活動や参加型学習の手法を体験することから、社会参画意識の向上へとつながり、「学んだことが社会の中で生かされる」という意識をもっている生徒が多くみられるようになり、学ぶ意欲の向上が見られた。

- ・ 外部機関との連携によるキャリア形成への影響

本科の学習では、大学生、地域の方、NGO 関係者、企業の方等、多くの外部機関との連携をしながら進めている。そのため多くの外部機関の方と生徒が直接お話をすることも多い。生徒は、こう言った社会で活躍する方と直接触れ合うことで、社会を良くしたいと思ったり、社会のために役立ちたいと考えたりしており、将来のキャリア形成に影響を及ぼしていると考えられる。

- ・ 社会参画意識の向上

本校では年間2回（7月と2月）に社会参画意識に関するアンケート調査を実施した。平成21年実施の日本・韓国・中国・アメリカ・日本の4カ国実施のアンケート調査と比較すると本校の生徒は、「自分の参加により社会を少しでも変えることができる」と思う生徒が日本の平均よりも高く、「とてもそう思う」と「そう思う」を合わせると毎年60%を超えている。

本校での実践を通して、社会との関わりを実感し、自分のできることや関われることを見出した結果、「自らが参加することで社会を変えることができる」と答える生徒が多くなったと考えられる。

「自分の参加により社会を少しでも変えることができる」 (％)

	韓国	中国	アメリカ	日本	上尾東 (H30)	上尾東 (H29)	上尾東 (H28)	上尾東 (H27)
とてもそう思う	11.7	17.4	14.9	10.2	24.5	21.8	20.9	13.7
そう思う	54.8	40.9	39.3	27.1	44.3	45.0	43.3	48
あまりそう思わない	26.9	29.4	19.5	40.9	24.2	28.0	27.9	27.2
全くそう思わない	5.1	9.9	9.5	18.6	5.7	5.1	8.1	7.3

「現状を変えようとするよりも、そのまま受け入れる方が良いと思う」 (％)

	韓国	中国	アメリカ	日本	上尾東 (H30)	上尾東 (H29)	上尾東 (H28)	上尾東 (H27)
とてもそう思う	10.6	14.0	25.4	32.1	9.6	7.6	10.3	6.5
そう思う	38.9	25.6	32.4	34.8	22.8	26.8	35.4	35
あまりそう思わない	39.5	33.9	17.1	25.0	50.5	51.3	43.6	45.9
全くそう思わない	10.8	25.1	10.6	7.1	15.8	14.1	10.6	8.0

平成21年2月(財)日本青少年研究所

「中学生高校生の生活と意識-日本・アメリカ・中国・韓国の比較-」より

イ 教師への効果

・指導方法等の改善

ファシリテーションの手法を用いて授業を展開することで、1つの課題に対して、多様な考え方があることに教師自身が気づき、生徒の意見を引き出している。日本のみならず、海外での取組に目を向ける教師や、新聞を数社読み比べ、資料を提示できるよう教材研究を行っている。生徒の中にある「多様性」に着目し、1人でも多くの生徒の意見を引き出し、つなげようとしている様子が見られる。

・カリキュラム・マネジメントの視点を用いた教科横断型の授業づくり

グローバルシティズンシップ科の学習内容と各教科がどのように関連付いているかを年間指導計画に示して可視化し、教科横断型の学びが実現されている。

教師が、担当する教科だけでなく他教科との連携を見据えて授業を行うことで、本校での「学び」が一体化し、教科の枠を超えて物事を考えることができるようになった。

・教育実践への意欲・自信・満足感／教師間の連携・協力

生徒同様に、日頃からグローバルシティズンシップ科で扱っている項目について新聞記事を集めたり、ニュース等を通じて情報収集を心がけたりする教師が増えている。また、お互いに情報交換をしながら、教師同士が情報を共有し合い、授業に向かう姿勢が見えてきた。

・教員研修への意欲

ファシリテーターとして活躍する方を講師として招き研修を行った。学年を超えて本科の取

組について振り返る時間を多く設けることや、目指す生徒像の共有を図り、授業改善へつながる研修を組み立てている。研修も参加型学習の形態を用いて実施し、実践者である教師が主体となって研修を進めることで、教師の意欲に向上が見られた。

- ・新学習指導要領との関連付け

平成29年7月に告示されている新学習指導要領前文において「(略)一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」と明記された。前文の記述と本研究が示す内容との合致する部分が記されたことは本校の教師への大きな自信となった。

- ・社会の変化へ先駆けた教育内容

4年間の研究期間の中で18歳成選挙の実施や18歳成人の制定など社会が大きな変化を遂げた。また国際社会においてはSDGsが採択され、世界で共有する目標となっている。本校での取組は社会の変化を先取りし、持続可能な社会を作るための学習として一つのモデルを全国へ示すことができた。

- ・グローバルシティズンシップ教育のモデル校

SDGsのゴール4に示されたターゲット7には、「2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、・シティズンシップ、文化の多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、すべての学習者が持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。」と記されている。ユネスコではグローバルシティズンシップ教育の推進を目指した教育モデルの必要性が求められ、本校の実践はアジア太平洋におけるユネスコ会議においてモデル校として取り上げられ実践発表の機会を得た。こうしたことから、教師一人一人がSDGs達成に向けて貢献していることを実感することができた。

ウ 保護者への効果

- ・保護者への情報提供

学校だよりやホームページ等で、本科で扱った題材について情報提供をしていることから、保護者も本科の取組について理解を示している。生徒と保護者の会話の中でも本科で取り組んでいる題材が出てくるが増え、学校、生徒、保護者が一体となって授業づくりを進めることができた。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

ア 研究実施上の問題点

- ・「コーディネーター」としての教師の役割

本科での実践を重ねるために「コーディネーター」役の教師が必要であった。研究の方向性を示し、学校全体の学習の流れを把握して研修を実施したり、外部との関係連携を進めたりする役

割を担う教師の存在が重要視される。今後、新学習指導要領で示されている「社会に開かれた教育課程」の実現に伴い、校内だけでなく地域、外部機関等の多様な方との連携を図ることが必要とされる。その窓口となるコーディネーター役と教師がいることが望ましい。

- ・実践の継続性について

教職員の異動に伴い、毎年、新しい教師を迎えている。最終年度を迎えた今年度は、学年ごとに今まで本校の研究に関わってきた教師が中心となって、異動してきた教師と情報の共有を図りながらプログラムを作り、研究を進めることができた。来年度以降の継続の方法について整理が必要である。合わせて、本研究をとおして協力を得られた関係機関との連携の継続についても校内で継続できる体制をつくる。

イ 課題

- ・生徒に対する「評価」をめぐる課題

生徒が作成したワークシートや発表資料、振り返り用紙等を用いたポートフォリオ評価と、単元ごとに作成したループリックを用いて評価を行っている。通知表では記述で評価をしているが、記述をする際の評価の観点と授業と指導の一体化がまだ十分ではない。「行動の変容」や「非認知的スキル」をどのように測ることができるのか、といった指標作りへの議論も進めていく必要がある。

本研究においては、アンケート調査によって「多文化共生」「社会参画」を測る調査を実施することができたが、その他の項目においては、数値として示す調査を実施するに至らなかった。そのため、今後は校内で資質・能力を測定するための評価指標を作成し、引き続き検証を続けていく。

- ・「プログラム評価」の実施

本科で実施しているそれぞれのプログラムと目指す生徒像の整合性を測るためにプログラム評価を検討する。各学年のプログラムを客観的に評価する指標を作成し、本研究の目指すところと本科での学びを強化する体制を整える必要がある。

- ・グローバルシティズンシップ科と各教科との連携

本科で得た学び、各教科で得た学びを互いに活用し合える仕組みをつくっていきたい。それぞれの固有の知識を各教科だけの「学び」にとどめるのではなく、カリキュラム・マネジメントの考え方を生かし、教科間で連携し合い知識が相互に転移し「教科」の枠を超えて活用できる工夫を考えていく。同時に、生徒も教師も本科で資質・能力を各教科で生かし、各教科での活用を目指したい。

上尾市立東中学校 教育課程表（平成30年度）

	各教科の授業時数								外国語	道徳	総合 学習的 のな 時間	特別 活動	新設 教科	総 授業 時数
	国 語	社 会	数 学	理 科	音 楽	美 術	保 健 体 育	技 術 家 庭						
第1学年	140	105	140	105	45	45	105	70	140	35	0 (-50)	35	50 (+50)	1015
第2学年	140	105	105	140	35	35	105	70	140	35	0 (-70)	35	70 (+70)	1015
第3学年	105	140	140	140	35	35	105	35	140	35	0 (-70)	35	70 (+70)	1015
計	385	350	385	385	115	115	315	175	420	35	0 (-190)	105	190 (+190)	3045

学校等の概要

1 学校名、校長名

アゲオシツカシユカッコウ モリタ ナオキ
上尾市立東中学校 森田 直樹

2 所在地、電話番号、FAX番号

埼玉県上尾市大字上尾村479番地
電話 048-775-6566 FAX 048-775-1165

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
196	6	228	6	231	6	655	18

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1		1	1		28		1		1	
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
1	1	2		37						